

巻頭言

この度、平成29(2017)年3月25日に開催された日本薬学会第137年会でのシンポジウム「日本発 顧みられない熱帯病創薬におけるパートナーシップの最前線」の講演録を刊行する運びとなった。顧みられない熱帯病の患者は世界で10億人以上にのぼるが、その大半が貧しい人たちであり市場性がないことから、製薬企業による通常の治療薬の開発は困難である。Drugs for Neglected Diseases *initiative* (DNDi)はこの問題を解決すべく顧みられない病気の治療薬開発を目的に、2003年7月にジュネーブで設立された非営利の医薬品開発パートナーシップ機関である。以来、DNDiはグローバルな産官学のパートナーシップを通じ治療薬の開発を行ってきた。

設立から2年後に本誌(臨床評価 Vol. 33, No. 1, 2005)で「ネグレクトド・ディジーズのための新薬開発：基礎から臨床へ」の題目で、当時DNDiの初代研究開発ディレクターであったSimon L. Croft氏(ロンドン大学公衆衛生熱帯医学大学院教授)、北 潔氏(東京大学大学院医学系教授、当時)、DNDiの平林史子氏、Chris Brünger氏、北里研究所の乙黒一彦氏と筆者をメンバーに座談会を開き掲載いただいた。当時はネグレクトド・ディジーズの和訳はまだなく、平林氏やBrünger氏の労作により「顧みられない病気」に翻訳されたものである。

顧みられない病気のうちWHOが指定する熱帯病(NTDs)に対する治療薬開発について当初は日本の製薬企業からの関与も少なかったが、2012年1月に世界の大手製薬企業13社、世界銀行、支援国、ビル&メリнда・ゲイツ財団などの寄付団体、感染流行国の保健省、DNDiおよびWHOからの代表が一堂に会し、NTDs制圧の声明を出したロンドン宣言の採択や、日本政府、製薬企業5社(発足時)およびゲイツ財団の出資で、世界に類がない我が国の官民パートナーシップとしてグローバルヘルス技術振興基金(GHIT)ファンドが2013年に設立されNTDsやマラリア等の新薬開発支援が始まったことで、日本の産学によるNTDs治療薬開発が大きく進展している。NTDsについては一般に馴染みがあまりなかったが、2015年の大村智北里大学特別栄誉教授らによるオンコセルカ症やリンパ系フィラリア症(いずれもNTDs)治療薬のイベルメクチンの発見と開発に対するノーベル生理学・医学賞受賞は、NTDsを知らしめることになり、NTDsとその治療薬開発への動きは急速に変化している。

本シンポジウムの講演録は2015年3月開催の日本薬学会第135年会シンポジウム「日本発 顧みられない熱帯病治療薬開発への挑戦」(臨床評価 Vol. 43, No. 1, 2015)の続編といえるもので、本記録からパートナーシップを通じた日本からのNTDs治療薬開発の現状と成果

をご理解いただき、さらに新たな産官学のパートナーの参入を期待するものである。2005年の本誌座談会で語られた顧みられない病気の治療薬開発への目標や夢について、12年を経過したこの辺りで同じメンバーによる検証のための座談会を開き、これからを考えてみたいと願っている。

なお、本号ではその他に、「日本主導型グローバル臨床研究体制整備事業」や、我が国の臨床研究・治験に関する基盤整備に関する状況調査の貴重な報告、臨床研究法に関する制度をめぐる重要な議論なども合わせて収載されている。関連する課題を検討する良い素材となれば幸いである。

山田 陽城

北里大学名誉教授

特定非営利活動法人DNDi Japan 理事長